月刊
えくてびあん
立川と語ろう　立川に生きよう
1
〈EKUTEBIAN VOL.17 JANUARY 1999〉
◆ベスト立川人・展'99開催◆
平成11年1月12日→21日午前10時→午後7時
（最終日は午後5時で閉展いたします。）
立川駅ビル・ルミネ6F「ルミネギャラリー」
消火器

たちかわの石仏たち　最終回

普濟寺の『四地蔵』

柴崎町にある普濟寺は由緒ある名刹であると同時に、立川の歴史を語る上で欠くことのできないお寺です。多くの貴重な文化財が保存されていましたが、平成七年四月、心無い者の放火によりその幾つかを焼失してしまいました。

墓地の西の入口から入ってすぐ右手に、庚申塔や馬頭観音と並び四体のお地蔵さまが祀られています。右の二体には新屋敷（あらやしき）念仏講中と念仏供養の銘があります。新屋敷とは今の柴崎町一丁目の一角にあたり、北と南に分かれていたそうで、それぞれの講中で建立したものと思われます。三体目には岩舟地蔵念仏供養の銘があります、岩舟地蔵とは亡くなった人を現世から浄土へ、頑丈な岩舟に乗せて渡す地蔵尊だと伝えられています。左端のお地蔵さまは一番古く、左右には法名が刻まれ、墓標型といわれています。

十二月八日、普濟寺では本堂の棟上げ式が行われました。完成の日を、お地蔵さまも心待ちにしていることでしょう。

立川民俗の会　中島玲子さん・談

●所在地：柴崎町4-20-46　普濟寺墓地内
●建立：奥から天明8年（1788）、亨保11年（1726）、亨保4年（1719）、寛文9年（1669）。
※平成10年11月、破損部を修復

吉例『ベスト立川人・展』

◆第14回「こんな個性と出会う街」◆

新春恒例『ベスト立川人・展』に今年も、こんなにたくさんの個性が集まりました。
活き活き、伸び伸びと「自分」を生きる立川人、
その表情をえくてびあん精鋭の写真家たちがとらえます。
それぞれの写真に漲るエネルギーに触れれば
チマタの不景気風など、まさにどこ吹く風。
'99年の事始めも、どうぞ『ベスト立川人・展』へ。

大澤 清さん（柴崎町）
定年後、第三の人生にまた学問の道を選んだ「万年青年」。

橋本ライヤさん（錦町）
フィンランドから立川に嫁いで24年。至誠ホーム嘱託、大学講師、翻訳家と八面六臂の活躍。

野島勇司さん（富士見町）
無色透明のガラスの器に絵柄を掘りこみたちまち「アート」に昇華させる。

鈴木美智子さん（西砂町）
自家製の石窯を使って焼き上げる窯焼きパンが大人気。今や西砂文化圏の中心。

内木文英さん（都内在住）
日本児童演劇協会会長。砂川昌平氏とともに戦後、砂川の子供たちに夢と希望を与えた。

吉川勝子さん（柴崎町）
高松宮杯を２度受賞。女性たちに手芸の本質を伝え続けるニット・デザインの草分け。

昭和一高・機械研究部（栄町）
マイレッジのみならず、今年は他流レースにも参加。若き研究者たちの挑戦は続く。

四戸世紀さん（錦町）
帰ってきた首席奏者。ベルリンで培われた技術と深まる人間性、音は更に叙情を増す。

伏見裕子さん（曙町）
数々の事業と良質な企画をもって立川文化を牽引。ギャラリー「新紀元」オーナー。

三澤英司さん（上砂町）
長野パラリンピック・アイススレッジホッケー代表。次大会はメダル確実。

松本雅隆さん（幸町）
「ロバの音楽座」主宰。次世代＝子供たちへ贈る吟遊音楽は、唯一無比の存在。

第14回『ベスト立川人・展』

●平成11年1月12日（火）→21日（木）午前10時→午後7時
●立川駅ビル・ルミネ6F「ルミネギャラリー」
※最終日は午後5時で閉展いたします。

始発！
～多摩都市モノレール開業記念・特別ルポ～

去る11月27日、多摩を南北に縦断する「多摩都市モノレール」がついに暫定開業（立川北駅～上北台駅）に至ったことはご存じのとおり。前日の26日には、青島幸男都知事ら多くの関係者が出席して開業記念式典を挙行。晩秋の青空を背景に、銀地にオレンジのストライプ輝くモノレールがデモンストレーション運転を行った。そしてその夜、本開業を翌日にひかえた立川北駅の構内には、数人の人影があった。そう、それは"始発一番乗り"を目指して前夜から泊まり込もうとする若者たちの姿だった。今回えくてびあん取材班は、彼らと一緒に夜明かしを決行。「立川北駅発５時37分」の始発に乗り込むべくその列に加わった。これからお届けするのは「始発」に賭ける若者たちの想いと、寒さとの戦いの記録？である。それにしても、スタートからこんな愛され方をするなんて、モノレールよ、お前は幸せモノだ！

■大村肇さん（富士見町）は会社を休んで、なんと前日のお昼過ぎからスタンバっていた。「子供の頃から、絶対一番に乗るんだと決めていた」と語るそのお顔は、心なしか眠そうです。ガンバロウー

■２番手につけたのは八王子からやってきた高校生２人組。右から上条和次君、島田光春君。来春には２人とも鉄道関係の仕事に就くことが決まったそうだ。上着を忘れて寒そう。

■３番手も高校生。東大和南高校に通う４人組。右から北村千秋君、師岡克文君、高柳忠政君、村山博一君。受験直前だってのに、君ら大丈夫か？

■シャッターが降りた階段の踊り場。寒さと眠さを我慢しようと、お互いにエールを送り合うトップ・グループの面々。始発まであと３時間だ。

■午前4時50分。予定より早くコンコースへ通じるシャッターが開く。記念切符を求める行列は、たちまち40人を超えてしまった。

■普通乗車券、回数券、記念切手など数種の切符を買い終えて、ようやく改札を抜ける大村さん。さあ、いよいよモノレールだ！

■自動券売機の通し番号「0001」番の乗車券を手に入れたのは、４人組のひとり、師岡君。これぞまさしく"記念キップ"といえよう。

■「早く来いよ～」。ホームでモノレールの到着を待つ上条・島田コンビ。この待ち位置からすると、君たち、運転席のすぐ後ろの席を狙っているようだね。それにしても相変わらず寒そう。

■とうとうやってきた！　上北台を出て立川北駅に到着するモノレール。折り返し5時37分、立川北駅からの始発列車となる。

■出発前にちょっとしたセレモニー。運転手さんに花束の贈呈。カメラを構えている人は報道陣にあらず。ほとんどが一般の乗客だった。

■とうとう発車したモノレールの車中。吊り革を握りご満悦の大村さん。"夜明け前なので景色を楽しむことは無理だが、"車内の構造や設備を事細かに観察し始めた。その旺盛な好奇心に脱帽。

■学校に近い玉川上水駅で降りたつ４人組。始発時間まで一体どうやって過ごすのだろう？　とりあえず授業中。居眠りすんなよ。

■終点の上北台駅までわずか13分の旅。あっという間だが、少年時代からの夢を実現させて、思わずＶサインの大村さん。寝顔も輝いてるぜ。

●十一月二十七日、午前一時。JR立川駅北口を降りて左、第一デパートのちょうど向い側にそびえ立つ近未来的な建物。昨日は記念式典で賑わったこの「立川北」駅も、さすがに今はガランと静まりかえっている。徹夜で始発を待つ人を求めてやってはきたものの、こりゃ空振りかなと思っていたら…いた！　二階デッキから三階コンコースに通じる階段の踊り場、手摺のガラスを風避けにして、彼らはグルリと円を描くように座っていた。全部で七人。我々えくてびあん取材班は彼らを「トップ・グループ」と認定、始発までの行動を共にすることを決定した。

●それぞれが一番乗りを目指してやってはきたが、圧倒的な「早さ」で先頭につけたのは、多摩市のケーブルテレビ局に勤める大村肇さん（二十三才・富士見町）だ。彼はこのために会社を休み、なんと二十六日の午後二時頃から待機していたという。ここまで一番にこだわるからには、今までに何度も「徹夜で行列」の経験を積んできたのではと思いきや、意外にも今回が初めてだという。

「モノレールは特別。僕が物心つく頃から、既に立川ではこの話が出ていて、必ず一番に乗ってやると思い続けていた」（大村さん）

座布団代りの新聞紙に座り、傍らには寝袋。カメラを向けると、眠気をこらえ笑顔で応えてくれた。

●二番手につけたのは八王子市在住の高校生、上条君と島田君だ。彼らは池袋にある鉄道高校に通う高校三年生。すでに鉄道関係の仕事に就職が決まっている。ここに並ぶ理由が一番わかりやすい二人である。ちなみに彼らがやってきたのは二十六日午後十時。絶対一番だと思って来てみたら既に先客がいた、と少々口惜しそう。大人しいのか眠いのか、二人とも口が重たい。気がつくと身体が小刻みに震えている。なんとこの寒いのに上着を持っていないではないか。

「忘れちゃったんです…」（上条君）

……頑張れという他ない。

●日付が変わる午前零時頃にやってきたのは、東大和南高校に通う四人組。村山君、北村君、高柳君、師岡君。全員高校三年生だ。前の二人とはうって変って、こちらは全員完全防備で参上。防寒具どころかビデオカメラやCDラジカセなどといった、よくわかんないモノまで持参してきた。朝方までの不眠の戦いを、あらゆる手段を講じて乗り切ろうとする意欲は凄い。そういえば、今は受験の前の大事な時期なんじゃないの？

「問題ないっすよ！」（北村君）

若いって素晴らしい。

●彼らの輪に加わり、デッキのフロアに腰をおろして朝を待つことにした。村山君が分けてくれた新聞紙を下に敷いてはいるものの、その冷たさは予想以上。十分も座っていると腰の辺りから身体が固まっていく感じがしてくる。この季節に屋外で、しかも徹夜で何かを行う場合、油断ならないのは気温の低さからくる「寒さ」ではなく、コンクリートなどの「冷たさ」ではないだろうか。しばらく膝を抱えていたが、じっと座って待つよりも体を動かしている方が賢明だと判断。各自がそれぞれに動き始めた。

●時折通る警備員から盛んに情報を収集する大村さん。ジャーナリスト志望だったというだけあって、その取材力は抜群だ。予定より早くコンコースが開場されること、記念切符の販売箇所など、多くの情報を持ちかえってきた。

●上条・島田コンビはひたすら寒さとの戦い。ブレザーの袖をひっぱり、手を突っ込んだ形でウロウロ、ウロウロ。二人でお喋りに熱中し、なんとか気を紛らわそうとしているようだ。我々からの差入れの缶コーヒーを受け取る手も震えている。大丈夫か、おい。

●一方、四人組はといえば、持参したビデオカメラで撮影会を開始。各々が交代で演者になり、カメラマンになって即席の「映画」を撮影し始めた。台詞まわしを聞いていると、どうやら刑事ものらしい。無人の二階デッキを犯人役、刑事役、カメラマンが走りまわる。何しに来てんだかと笑って見ていたが、どうでもいいことにやたら真剣に、夢中になってしまう姿はこちらにも充分身に覚えのあること。モノレールの始発を待つこの貴重な時間を、精一杯楽しんでやろうという彼らの姿を見ていて、少しだけ寒さを忘れた。

●午前四時を過ぎる頃になると、パラパラと人が集まり始め、いよいよ「行列」らしきものが出来上がってくる。カメラを手にしている人が多い。我らがトップ・グループの七人もそれぞれ荷物をまとめる。テレビ局の取材もやってきて、大村さんが取材を受けた。

●午前四時五十分。いよいよ三階コンコースに通じるシャッターが開けられた。全員、階段を駆け上がる。我々取材班も二手に分かれ、コンコースの切符売場に突入。記念切符売場には早くも長蛇の列が生まれた。大村さんはもちろん先頭。上条・島田コンビは、さっきまでの元気の無さが嘘のよう。いち早く記念切符をゲットし、四階のホームへと駆け上がっていった。よかった、元気じゃないか。

●そして、ついに運命の午前五時三十七分、いよいよ立川北駅発、始発列車が発車。ざっと数えると、乗客の数は一五〇人は下らないとみえる。もちろんトップ・グループの面々も、全員無事乗車を果した。運転席のすぐ後ろの席を確保した上条・島田コンビ、食い入るように運転手の動作を見つめている。四人組も各自カメラを抱えて「思い出づくり」に励んでいる。そして大村さんは静かに、しかし熱っぽく車内を見回して、感慨深げにつぶやいた。

「いやあ、夢が叶いました」

夜明け前の町並をぬって、モノレールは滑るように北へ走る。終点「上北台」駅までわずか十三分。七人の戦いはここに成就した。

■11月26日、本開業を翌日に控え、構内で記念式典が行われた。大勢の取材陣を前に、青島都知事らによる盛大なテープカット。

真味百撰㉑　おふくろの味　ななや

柴崎町2-4-22 / 525-6980
11：00～14：00、17：30～22：30 / 日・祭日定休

無理せずあせらずコツコツと。シンプルさゆえの貴重な存在感を保ちつづけて11年目。

カウンター席が８つと小さなお座敷。こじんまりとした店内には煮物の香りと湯気が立ちこめ、まるで親しい家の台所を訪ねたような気楽さがある。

普通の主婦だった真神（まがみ）淳子さんが一念発起して、「ななや」を開いたのは昭和63年。以来11年間"出来合いではない手作りの味を安い値段で"という当初からの思いを今に続けている。ちなみに「ななや」とはお惣菜の「菜々」からとったもの。

昼食時にはお手伝いの方もいるが、基本的には真神さんが仕込み、仕入れ、調理とすべてを一人でこなす。もともと料理が大好きだった真神さん、手作りにはこだわるが、無理をせず自分にできることをコツコツと続けて、気づいたら11年経っていたという。「B型だからマイペース」とご本人は笑うが、押しつけがましさを感じない店の雰囲気は、そのまま真神さんの人柄だろう。

昼の定食メニューは煮物、お新香、サラダの小鉢がついて800円前後。旬の魚が味わえる「煮魚・焼魚定食」が人気（写真は子持ちカレイの煮魚定食・880円）。夜は一品のおかずを頼み、「天狗舞」などの日本酒を楽しむのがいい。今の季節は「湯豆腐」（650円）や「キムチ鍋」（750円）がおすすめ。その日の材料次第では献立にないものを頼むことも可。

シンプルであるがゆえに安心して味わえる店だ。

東風

眼鏡をはじめて掛けた時の違和感をご存じであろうか。近くも遠くもようく見渡せるけれど、どこか不安で、どこかこころ嬉しいものである。コンタクト・レンズをはじめて装着した時の日常にはなかった違和感も、今となっては懐かしいくらいなものだ◆十一月二十七日に開通されたモノレールも同様なのかなあと思わせる一面もあった。あまり声は大きく響いてこないが、モノレール反対者は結構いるらしい。なにもあんなもの通さなくたって、いままでの交通網で充分ではないか。つまり、眼鏡なんて掛けなくたって、あるがままでいいじゃないかという言い分である◆事実、用地の買収で住居の移転を止むなく認めた人、商売は立地が大切だが、今回の件で家業を失った人が幾人もおられたと聞いている。そういう人たちにとっては、腹の底から「こんなもの、いらない！」と叫びたいところであろう。私たちはいつも「便利」なものを求めている。きょろきょろした日常と云ってよいであろう。大昔の記事をみると、陸蒸気の出来たては沿線に人だかりがしていたらしい。だが、モノレールよりも大規模な犠牲者が続出していたにちがいない。省線が出来た時も同様であったことだろう◆しかし百年もたてば、太古から存在しているように、われらがモノレールは知らんぷりして走り続けることであろう。傷ついた人のこころも癒されよう◆初御空　手に風とまる　えくてびあん

（表紙）きり絵「卯建のある街」　田邊榮枝
（編集）池田隆男　小林康史　内藤裕子　名尾居真　山田康子　大久保清志　新井紀美子
（写真）井上義治　中村伸　五來孝平

月刊えくてびあん　第174号
平成十一年一月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市曙町2-17-5
杉田ビル6F　〒190-0012
電話　〇四二（528）〇〇八二
FAX　〇四二（528）〇〇六五
編集発行人　立井啓介
印刷所　㈱大廣社

連載　四字熟語（17）

光風霽月

こうふうせいげつ、と読む。

性格がさっぱりしていて胸中が清らかな、高潔な人物のたとえ。

光風は、晴れた日のうららかな風を、霽月は、雨上がりの澄み切った月をさす。その気持ちよい光景のすがすがしさから、心にわだかまりがなく、さっぱりと澄み切った人徳の士の心境をいう。

人がいて、街があります。
あなたがいて、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん！
リストのお店にはいつでも、えくてびあん！

今月は柴崎町・砂川町・富士見町・若葉町のお店です。

柴崎町

- カフェべる・こむーね　柴崎町2-2-7　529-7800
- 寿司由　柴崎町2-2-8　522-3733
- 関田酒店　柴崎町2-2-17　524-2960
- ビストロすぎ浦　柴崎町2-2-23　525-9929
- ラ・バンバ　柴崎町2-3-3　524-5800
- クワトロ　柴崎町2-3-3　528-2983
- キャノン01ショップ　柴崎町2-3-6　528-1501
- コミュニティ・ストア はなむら　柴崎町2-3-9　522-2491
- ユウ都市企画　柴崎町2-3-13　528-2566
- コマツホーム　柴崎町2-4-6　525-5811
- 喫茶 キャリー　柴崎町2-4-7　528-2630
- かみゆい処 わ　柴崎町2-4-8　522-8202
- 芹沢ガラス店　柴崎町2-4-8　522-3065
- 小室園　柴崎町2-4-8　522-2894
- カフェレストラン ほまれ屋　柴崎町2-4-15　526-2232
- ファッションハウス ほまれ屋　柴崎町2-4-15　525-2788
- オーロール焼きたて 立川店　柴崎町2-4-15　527-9473
- ぼだい樹　柴崎町2-4-18　528-0556
- 北京大飯店　柴崎町2-4-19　522-6393
- ななや　柴崎町2-4-22　525-6980
- 田中星美堂薬局　柴崎町2-5-3　522-3913
- 菊川園　柴崎町2-5-6　526-2035
- cafe コロラド　柴崎町2-5-8　526-2285
- マエダ文具　柴崎町2-6-2　525-6584
- スタジオ269　柴崎町2-8　527-0269
- 手造りのお弁当 くりや　柴崎町2-9-3　523-2590
- 立川高等技芸学院　柴崎町2-9-4　522-3424
- 食事処GOSAN　柴崎町2-9-27　526-2200
- 石原薬局　柴崎町2-10-3　523-4067
- 輪輪館　柴崎町2-12-17　522-8100
- ビジネスホテル クボタ　柴崎町2-12-23　522-1122
- いなげや 立川南口店　柴崎町2-12-24　526-2947
- 白洋舎 立川諏訪チェーン店　柴崎町2-17-5　525-0036
- ブックスしんあい　柴崎町3-1-1　527-6701
- ロッテリア 立川南口店　柴崎町3-1-3　522-3928
- 割烹 紀ノ川　柴崎町3-4-3　525-5825
- かつ亀　柴崎町3-5-2　525-7647
- ヨシダ貴金属店　柴崎町3-5-4　522-2448
- イスパニスタ　柴崎町3-6-3　522-2969
- 東京相和銀行 立川支店　柴崎町3-6-17　522-2171
- サンカメラ　柴崎町3-7-2　522-3336
- 笠井紙店　柴崎町3-8-7　522-8601
- 東京都民銀行 立川支店　柴崎町3-9-21　522-7101
- あさひ銀行 立川支店　柴崎町3-10-1　522-4161
- 松山堂薬局　柴崎町3-13-25　522-2550
- こむろ酒店　柴崎町3-14-3　522-2613
- 矢沢歯科　柴崎町3-16-2　525-6600

砂川町

- JA経済センター 立川店　砂川町2-44-3　536-1824
- JA東京みどり 立川支店　砂川町2-44-3　536-1821

富士見町

- ダイクマ 立川店　富士見町1-24-9　526-1161
- リーセントパークホテル　富士見町2-1-8　526-3111

若葉町

- ふとんの青木寝商　若葉町1-8-1　536-6833
- 美容室 リラ　若葉町1-11-1　536-3048
- みふじサイクル　若葉町1-12-4　536-7166
- 紀ノ国屋 立川店　若葉町1-13-2　536-1604
- いなげや 若葉町店　若葉町3-21-1　537-4199

たみ子さんのうた

5

画・杉山紀美子

詩・清水たみ子

原っぱ

原っぱへいくと、
笑ってる。
とても大きな大きな人が、
白い雲から声だけして、
青空いっぱい
笑ってる。

原っぱへいくと、
うたってる。
とてもちっちゃなちっちゃな人が、
草の中から声だけして、
地めんのどこかで
うたってる。

昭和六年「赤い鳥」八月号より